

御雇教師ミュルレルとホフマン (二)

小 関 恒 雄

前報^(一)(あるいは他誌^(二))で、ミュルレルとホフマンの履歴や逸話を中心に述べた。今回は彼らの教育研究上の業績や著述を中心に記す。また、これまでの不備を補いたい。いずれも細々としたことながら、既報を含め御批判を仰ぎたい。さらに、すでに紹介されていながらあまり流布していない事柄も記しておく。

ハイチ政府公文書

ミュルレルは一八五六〜一八六七年の間、ハイチのポルトープランスに招かれ「軍隊及ヒ軍事病院総監^(三)」を務めたところが、詳細はわかっていない。わずかにハイチ国立図書館(Bibliothèque Nationale d'Haïti)に彼の建言書が一件見出される^(四)。

一八五九年、ラーケイ(Les Cayes)からのものであるが、彼が当時ここに住んでいたのか、一時駐留していたのか、わからない。

一八五九年二月十四日(前後の経緯はわからないが)彼は政府当局に海軍病院設置の建言を送っている。すなわち、当地の衛生医療事情の困窮不備を訴え、水兵たち(寄港外人兵士も含め)が安心して受診入院できる施設を創ること、五年間に一二人の医学生を養成し彼らを保健衛生士官として任用すること(半数は政府が選り、他の半数は医師の選抜に任せ

る)、病院(二四床ぐらゐの)建設資金としてラーケイ港に入港の遠洋船にハイチ銀貨十枚の税金を掛けること、医師は政府中央と直結していること、云々。

ミュレルルの建言通り、この病院が実現したかどうかは不明である。働き盛りの一二年間にさまざまなことを成したであろうが、以上を管見しえたのみで、同書第三冊にも何も見出せない。

クニツピング描くミュレルルとホフマン

クニツピングは明治四年、ミュレルルらに先がけ南校に雇われたドイツ語教師であるが、後年、回想記の中で彼らを描いている。^(五)その部分を以下抄出する。

「最初の医師〔東校教師〕は軍医少佐のミュラーと海軍軍医大尉のホフマンで、前者は外科と解剖学、後者は内科学を担当した。そして予科教師として、化学のドクトル・コッヒウス、物理学のドクトル・ヒルゲンドルフ、薬剤師としてニーヴェルトの三氏が新たに加わった。」「ミュラーは長い間ハイチにいて、ハイチの娘と結婚した。彼の夫人のドイツ語はブロークンであり、ほとんどフランス語を話していた。彼女は氣立のよい婦人であったが、言葉遣いや振舞いが無邪氣といおうか、しばしば子供じみてさえた。」「一方、ホフマン夫人はきわ立って美しい人であったが、つんとすましていた。」「ミュラーは一夜として一人で過すことはなかった。たいてい夕方には来客があるか、あるいは知人を訪問したのである。五人の教師たちは皆、江戸のもっとも美しい公園の一つである上野公園に住んでいた。」「当時、医学校の建物は街の中央の平坦な場所にあった。ミュラーが指導的な医師として任命され、月額六百元の報酬を受け、一方、ホフマンは三百円であった。両氏はともにプロイセン政府の仲介で来日したものである。」「ホフマンはしばらく経ってから、日本の事情を探った後、年長の權威ある日本の医師に、彼が医師として学問的に同等な同僚ミュラーと金銭

的にも同様に遇してほしいと要求した。彼はある死体の心肥大を証明するため、解剖する前に、針で拡張した心臓をなぞってみせた。^(注一)開腔してみると、彼の言った通りであり、その時から彼も六百円の月給を得るようになった。さもないと本国召還を申請すると迫ったからである。さらにホフマンは陸軍省の顧問医の地位を得るのに成功し、それで毎月二百ドルの収入を得た。また、毎週横浜に執務時間中に出向き、一時間当り十ドルの対診料を、また患者の往診には二十ドルを請求した。それで、彼の月収はちょうど千ドルになったのである。ところが彼は金坑に投機をして、実に一万ドルも失ってしまったそうである。」

「ミュラーはまったく違った性格だった。彼はいつか、こう言っていた。―私は二人の子供が必要とするものを彼らに送ります。そして収入の残りを江戸で支出します。私は日本人に、私がドイツで遣うために日本で金を貯めたといわれたくないのです。」ミュラー夫妻はよく私の家にやって来た。しばしば彼らは何の前ぶれもなく訪ねてきて、夕方までいた。彼は一八七五年まで私たちの家庭医だった。」

クニッピングの言うことがなにもすべて正しいというつもりはないが、ミュレル夫人の印象など写真でみる限り^(六)納得できよう。ただし三宅秀によれば、夫人はフランス人で後妻、子供はなかったという。^(七)

医学生処分と学級組分け

ミュレルによれば、^(八)一八七一年の十二月末に「一般的な試験の方法で篩にかけ、その結果合格したのは五十九人だけだった。しかもこの中からもその後六人が退学し、さらに病氣、死亡その他特別の事情などで在学生の数はぐんと少くなり、われわれの任期が切れた時「明治七年？」には三十五名に減っていた。」^(八)という。

この五九人にしぼった時点の詳細はわからないが、その後明治七年当時のクラス編成経過の様子は記録が残っている

〔文部省雑誌〕一二号、一八七四。すなわち「今般第一大学区東京医学校ニ於テ明治六年ヨリ七年ニ至ル冬半期生徒学業ヲ試験シ教授独乙人「ミユルラル」及ヒ「ホフマン」ヨリ開申セル表左ノ如シ」とあり、一等本科生、二等本科生、一等預科生、二等預科生（一ノ部、二ノ部）までクラスが進級している状況がよくわかる（なお、小関参照）。

うち一等本科生を羅列すれば（成績別組分）、一ノ甲（岡玄卿、須田哲造、橋良任、三瀧謙造、印東玄得、原田豊）、一（菅野順、柳下貞橋、小林玄海、中村良益、宇野朗）、一ニシテ不及ニシテ有余（山崎元脩、吉田貞準、三浦省軒、大多和七郎、浜野昇、桜井郁太郎、山崎泰介、赤鹿東策）、二（河野貫道、松沢元貞、野口安次、山田小弥太、渡辺悌次郎、長谷川順次郎、三浦浩一、小野梁吉、石川仲全、大川宗炳、大河内和、室賀六郎）、一ニシテ不及三ニシテ有余（浅川岩瀬）、全期病ニ罹ルヲ以テ番外トス（今村去三）。これら一等本科生は計三三名で、ミユルレルのいう三五名（誰彼を指すのか不明）とは合わない。当時、組替等があったものか不明であるが、ともかく彼ら三三名のうち、山田小弥太、今村去三を除く三一名が明治九年東京医学校卒業生となる。

二等本科生は高階経本、佐々木政吉ら計三三名が挙っており、彼らのうち清水郁太郎や佐々木ら計二〇名が明治十二年卒のいわゆる第一回卒業生となる。

「病院建築」建言

ミユルレルは着任当時の東校（和泉橋通の藤堂屋敷）を次のように描いている。「屋敷」すなわち「幅の広い堀で四方の通りから隔てられている区画の一部または全部」で、「排水口が全然ないか、あっても十分に排水できないこの堀へ屋敷の水が流れ込むので、堀に溜った水は悪臭を放っている。」屋敷には池や裏庭や中庭が沢山あり「そこへ汚い水が棄てられたり、果物、魚その他の食物の屑が投げ捨てられるので、堀の淀み水と同様、何のことはない伝染病の巣が出来ているようなものである。」さらに汲取り式の厠が沢山ある。「病院の場合、狭い部屋に大勢の人間が同居することになるので、

この環境はさらに悪くなった。」

ミュルレルらは劣悪な医学校の現状を訴え、移転新築を建言した(『公文録』明治七年三月文部省伺)⁽¹⁰⁾。細かい経過は省くが、文部省および医学校当局は移転先を明治六年一月以降上野山内に絞り、計画を進めていたが難渋していた。⁽¹¹⁾ 直接にはこれら一向に進展しない現状への催促である。⁽¹²⁾

「抑当所医学校ハ天下万民ノ病苦ヲ救ハンカ為メ生徒ヲ教育スル所ナレハ最モ注意セズンハアル可ラサル所ナリ然ルニ去ヌル夏中以来医学校並ニ預備校ノ生徒等病ニ罹ル者半ハニ居レリ之レニ依テ暫時廢業ノ免レサルノミナラス学科進歩ノ害等シク健康ノ輩ニ迄ブ然リ而シテ病症ヲ診察スルニ過半ハ脚氣病ニシテ実ニ怖ルヘキノ甚シト云ヘシ」⁽¹³⁾「脚氣病ハ土地ノ性質ニ関スル者」であるから「病院中へ充滿スル湿氣夥多ナルカ故へ当湿地暫ク御用ヒ被成候ニ於テハ伝染病ノ増益セシコト疑ヒナク存候」⁽¹⁴⁾「此ノ如ク惡疾病院中へ蔓延スルニ至リテハ活澁勉勵ナル生徒へ伝染シ自然医学脩整前ニ業ヲ廢スルニ至ルヘシ是レニ依テ学科進歩ヲ障碍スルノミナラス医学ヲ立テ置レシ御趣意ニ相戻リ可申ト臣等同役勤考候処当処ハ全ク四方ニ腐水ノ溜溝アルカ故純粹ノ内科病ヲ患ヘシ者モ当校内へ暫時滞在中或ハ身虚熱症トナリ或ハ瘡トナリ屢々永続ノ湿氣毒ニ伝染スル等其例少ナカラス」⁽¹⁵⁾「斯ノ如キ害ヲ防カントスルニ必ス先ツ高燥ノ地ヲ撰ヒ新病院及ヒ学校ヲ建築スルニ如カス」⁽¹⁶⁾「略」請フ臣等カ願ヒ御採用アリテ速カニ惡疾ノ憂ヲ避ケ勝地へ建築ノ備アラシムコトヲ臣等尚ホ生徒病症ノ原ヲ探クルニ精神活潑ナラサルハ全ク食料ノ不十分ナルト運動ノ少ナキトニ頼テ眼前ノ害ヲ避クル抵抗力ナク夫レ食料足ラサレハ軀身長大ナラス又運動多カラサレハ飲食消化セス飲食消化セサレハ遂ニ健康ヲ害スルニ至ル」⁽¹⁷⁾是レニ依テ考フル所来夏中必ス同等ノ害アルヘキコト瞭然タルカ故臣等同役議決シテ其惡患ヲ除避センカ為メ御省へ左ノ件々注目ノ次第奉建言候」

第一項

病院、学校及ヒ寄宿舎等新ニ建築成サレ候ニハ尤モ高操^{ママ}ノ地ヲ撰ヒ四方圧塞セサル所ニシテ諸省ニ離レサルヲ可トス又
新地建築ハ遅クトモ千八百七十五年ノ夏初旬迄ニハ成功シ住居相叶ヒ候様致度候事

第二項

去ル夏中脚氣病及ヒ湿気毒ヲ受ケシ生徒ハ遅クトモ来六月ニハ高台乾燥ニシテ空気流通スル地へ移転サスヘキ事

第三項

脚氣病ヲ患ヘシ生徒ノ中若シ同人ノ本国脚氣病ニ害ナキ地ナレハ暑中ノ間帰郷致サスヘキ事

第四項

総体ノ生徒ハ東京ノ悪シキ氣候ヲ避クル為メ尤モ注意セスンハアル可カラス故ニ休暇ハ少シク早ク始メ遅ク終ルヲ要ス
ル事

第五項

病ニ罹リ暫時業ヲ廃スル生徒全数ノ三分一ニ滿ツレハ他ニ伝染スルヲ予防センカ為メ閉校致スヘキ事

第六項

寄宿舎及ヒ学校ノ便所ハ少ナクトモ夏ノ間多量ノ伝染毒駆除薬ニ由リテ其悪臭ヲ去ラスンハアル可ラス

第七項

生徒ノ食料ハ日々用ユル所ノ肉ノ分量少ナクモ三百「グラム」〔略〕ト定ムヘキ事

第八項

生徒ヘ日々二時間ノ休暇ヲ与ヘ随意ニ運動ナサシメ尚ホ季候ニ依テ其時間ヲ定ムヘシ〔略〕又毎級ノ生徒皆教師ト共ニ
博物学ノ徘徊ニ順々立シムヘキ事

第九項

体操術ヲ以テ学科ノ一部トシ諸生徒ヲシテ他ノ学科同様尽力勉勵致サシムヘキ事

千八百七十三年十一月廿日

ドクトル、ミユルレル

同 ホフマン

同 コツヒユス

同 ヒルケンドルフ

同 フンク

同 ホルツ

同 デニツツ

文部省御中

以上、彼らの建言の力点は生徒の健康管理に置かれ、そのため急遽「高燥ノ地」への学校新築を訴えているのである。

もちろん、当時脚氣の原因はわかっておらず（『医事新聞』二九号、一八八〇、宗田(二二)その他）、伝染説、中毒説、栄養障害説等諸説があったが、ホフマンらは身体の栄養不足衰弱とし、当然対症療法として栄養改善を採っていた。この食料云々ということは実際行われていたらしく、当時の寄宿舎の宿料が四円五十銭もしたという。これは、ホフマンの説では脚氣は食事に関係があるというので、朝は卵三個とお汁、香の物、昼は百目位の牛肉一皿、夜は魚、牛肉のスープ、野菜といった献立だったという（『東京帝国大学法医学教室五十二年史』一九四三(二〇)より）。

ミユルレルらは、ともかく取りあえず当面必要なバラック建を急ぎ、大建築（本格西洋式）は順次時間をかけて施行することを提言し、設計図を提出した(八一〇)。しかし、結局政府は出費多端の折、明治五年炎上の皇居新築さえままならぬ時とあ



図1 レオポルド・ミュルレル

って、あっさり見送られた。そして「建設資金として計上された五十万円の予算は、台湾征伐費その他いろいろな財政支出に振替えられた。」^(八)という。そして「最初の案を基にして日本風のバラック建の衛戍病院」^(九)が本郷加賀屋敷に建てられたのは、彼らの帰国後である。

ミュルレルの肖像画

ミュルレルとホフマンの写真(肖像)は『東京帝国大学五十年史』(一九三二)のものが有名である。ミュルレルについては著者が二葉見出した。^(一〇)彼の夫人については先に触れた通りである。^(六)

ホフマンに至っては、この他一枚だけのようである(入沢が『中外医事新報』一二〇八号、一九三四に掲ぐ)。

ここにミュルレルの肖像一枚がある^(一三)。これはおそらく『東京大学医学部百年史』(一九六七)所載の写真からの模写であろう。図から推定する限り、一等軍医正(軍医中佐)の礼装であろう。ただし、肩幅が狭い、軍帽尖端部が鈍すぎる、顎紐が描かれていない、鉄十字勲章の佩用方法がおかしいなど、かなり杜撰な絵ではある(遠藤毅私信)。「一等軍医正」なら、明治六年(一八七三)^(注三)以降(の写真等から)のものであろう。

ついでに本文も記しておこう。「独逸帝国陸軍一等軍医正ドクトル、ミュルレル君ハ其前明治維新ノ際我政府ヨリ独逸政府へ碩学ナル医学教頭一名副教頭一名ヲ請求セラレシニ独逸政府ハ教頭トシテ君ヲ撰任ス君明治四年七月ヲ以テドクトル、ホフマン氏ト共ニ東京大学東校ニ到着シ学科ヲ更正シ解剖学ヨリ順次ニ教授シ殊ニ外科学術ニ秀テタリ期満テ更ニ宮内省ニ聘セラル明治七年七月西帰ス本邦ニ独逸医学ヲ齎シタルハ君ヲ最初トス君性雄爽任俠ニシテ生徒ヲ教育スルニ厳格

人皆之ニ服ス遂ニ勲四等ニ叙セラレ旭日小綬章ヲ贈与セラル西帰ノ后伯靈陸軍廃兵病院長ニ補セラレ現ニ其職ニ在リ。
「任侠」とは面白い。

薬学方面への貢献

彼らの薬学への貢献がままた忘れられている。以下、主として根本^(一四)による。

当時の医務局長、長与専斎は西欧の近代薬事制度の導入に際し、彼らに諮問して、明治六年五月「薬剤取調之法」を成案布達した。いわゆる医薬分業を目指し、薬剤師養成のための「製薬学校」設立、日本薬局方制定等を訴えたものである。彼らは同年六月「製薬学ノ一科、薬石ノ製煉、眞贋ノ鑑別、輸出入ノ方法ヨリ毒殺ノ裁判ニ至ル皆之ニ関セザルハナシ故ニ文明列邦殊ニ之ヲ重ンズ」とうたい、さしあたっての具体策として「製薬学校則案」を作成した。かくて、同年九月、医学校に製薬学科が開設される。

これに先立ち、ドイツ人ニーヴェルトを招いて薬学教育を開始しようとしたが、彼がまず薬局業務に専念したいと申し出たため、実際に製薬学教師(ドクトル・ランガルト)が着任するのは明治八年十一月であり、帰国するミュレルらと行き違いになる。

著作講義録リスト^(注四)

Müller: "Die Typhus-Epidemie des Jahres 1868 im Kreise Lützen (Regierungs-Bezirk Gumbinnen) besonders vom ätiologischen und sanitäts-polizeilichen Standpunkte aus Dargestellt", A. Hirschwald, Berlin, 1869

『東校医院治験録』(ミュレル・ホフマン説論治療表章)、卷之一(十一)、東校医院官版、須原屋伊八・島村屋利助発兌、壬申正月発閏(一八七二)。阿知波^(一五)は本書をもとにミュレルの外科学上の功績ないし限界を詳述しているので、

医学校 教官 司馬盈之 直訳 同 桐原真節 訳」とある（東京大学蔵）。

『病学一汎論』、『熱証論』、『診察論』。いずれも、ホフマンの口授を「日講記聞兼病院編集掛長谷川元良」復講、「自強社中新潟県角阪有馬」筆記せるもの。明治九年頃（慶応大学蔵）。

『大学東校方函』、『忽氏方譜』^{二六}。前者はミュルレル^{二六}ホフマンの、後者はホフマンの明治四、五年頃の「処方集」写筆本（国立教育研究所蔵）。

補 遺

(一) ホフマンの勲章還納問題

ミュルレルとホフマンは侍医であったが（たとえば『明治天皇紀』第二、第三、一九六九）、木戸ら高官もしばしば診療している。^(一)『木戸孝允日記』二、三（一九三三）によれば、明治四年（一八七一）十月より、ことに同九年六月以降、主としてホフマンが、長与専斎、司馬盈之らを伴い（又は代診）、足繁く往診している。主訴は「腹痛」「下痢」、そして「脳病」に伴う「左足の不自由」である。結局ホフマンらは明治八年十一月に帰国するわけであるが、木戸は全快に至らず同年五月に死去する。直接の死因は服部（『近代諸家の死因』一九八六）によれば、心臓血管障害にもとづく急性心不全とおもわれる。

件の木戸がホフマンに口約束したのであろう、^(二)ホフマンが「第二級勲章」受章と信じていたのに、勲四等に留ったので「斯ク下級ノ勲章」は不本意であるというのである。

この事件の顛末が一部すでに『日本外交文書』第十一卷（一九五〇）に活字化されていたので追記したい（「独逸人「ホフマン」勲章還納ノ件」の項）。

もう一つ、ホフマンは陸軍軍医寮と賃金のことで裁判に及んだ。^(三)これも、上記勲章問題と同根であろうが、当時日本人

の口約束の虚を衝かれた事件であろう。前記「裁判申渡書」に先立つ、東京上等裁判所より司法省への「裁判見込書」伺(明八・九・二三)があるので追記しておく(『太政類典』第二編三四三卷)。

(一)ミュレル、ホフマンの生没年

先にミュレルの生年を一八二二年と仄かしたが、その根拠を別報で詳述し、一八二二年四月二十一日生まれという説を紹介した。

(二)ミュレル、ホフマンの来日・離日年月日

前報で彼らの来日年月日を種々記したが、ミュレル本人の言う通り、一八七一年八月二十三日、すなわち旧曆七月八日(アメリカ経由)である(Japan Weekly Mail, Vol. 2, No. 34, 1871)。

離日の日は、ミュレルはこれも彼の言う通り明治八年十一月二十五日(サンフランシスコ経由)である(同紙 Vol. 6, No. 48, 1875)。またホフマンはその前日の十一月二十四日、上海経由で帰国した(同上紙)。したがって、前報で十一月中旬としたのは誤りである。ちなみに、上記紙上で医学教育者、侍医としての彼らの業績を称えている。また、ミュレルの帰国に際し、十二月二十三日の夜、横浜のオリエンタルホテルに約百人のドイツ人仲間が集い送別宴会が催された。十時過ぎ、ロシアのフリゲート艦のバンドを先頭に各々たいまつ行列を組み、海岸通りを通じてミュレル共々ゲルマニア倶楽部に向う。倶楽部での催しでヒルゲンドルフ(東京医学校博物学教師)が送別の辞を述べた。最後に国歌を斉唱し解散した。以上、ミュレルの記述と若干異なるので掲げておく。

おわりに

ミュレルについては、とかく軍医ということもあつて厳格な管理者ととられ、軍医学校を模して医学校を創り、その禍根が今日に及ぶと強調されている。一方、ホフマンは金に細かく、何かと約束を盾にとる人とみなされて、はなはだ覚

えがよくない。

前回以来、本稿では彼らの逸事に至るまで些細なことまでも挙げたつもりである。さらにホフマンの、明治六年秋、福岡地方に広がった「流行性脳脊髄膜炎」に対する当局下問への「医案」(『文部省報告』明治六年一五号)や、同じく熱海「温泉攻能書」(同誌、明治七年二一号)なども付加えておこう。

人物ないし業績の評価は、そこだけを切り離して云々すると見誤ることもある。以上、彼らの全体像把握の今後の資料として、些事ながら紹介した所以である。

総じて、当時の日本人にすれば(あるいは今日でも)、**柔**のホフマンよりも**剛**のミユルレルの方が理解しやすく、共鳴できたのであろうか。ただし、前述新聞紙面ではホフマンに対しより多くの行数を割き、彼の業績、とりわけ、皇族や政府高官に対する診療ないし相談役、在日外国人の頼みの綱として果たした功績を口を窮めて誉めている。

摺筆に際し、御教示、資料提示を戴いた故遠藤毅博士(西ドイツ)を始め、Mrs. D.S. Savain(ハイチ)、Mr. T. Vielhaber(西ドイツ)、鹿子木敏範教授(熊本大学)の諸氏、国立国会図書館、国立公文書館、NLM, OAG, 東京大学・順天堂大学・慶応大学・広島大学・東北大学各図書館、佐賀県立病院好生館、山口県立図書館の関係各位に深謝する。

注

- (一)「ホフマン師が臨床講義をする時には、医長^(一六)「佐々木東洋」が前以て患者の病歴現在症状書を作りととのへ、医員と共に待つてゐる。ホ師は訳官「三宅秀」を先導として来場し、病歴をきとりてから、患者について講義を開始した。」「或時、屍体解剖に際し、先生はホ師に向つて意外の希望を述べられた。それは屍体を解剖する前に、打診で心臓や肝臓の境界を予め定めおいてから、解剖して見せて頂きたいと云ふのであつた。ホ師は之をきき喜んで、其通りにやつてみせた。すると結果は打診と全く符合したので、生徒一同もホ師の技能を驚嘆したといふ。」^(一七)石黒忠憲曰く「ホフマンといふ人は、独逸でも有名な大家タラウベの門人で、打診聴診は殊更得意であつた。」(『叢録』一九二四)。

- (甲) Knipping, E.R.T.: Aufzeichnungen aus meinem Leben für die Kinder und Enkel, in *manuscript*
- (六) 小関恒雄「明治期の東京大学御雇教師、卒業記念、その他の写真」『医学選粹』三〇号、一七～二〇頁、一九八二年。
- (七) 入沢達吉「レネオポルド・ミュルレル(本邦医育制度の創定者)」『中外医事新報』一一〇〇号、四〇三～四一三頁、一九三三年。
- (八) Müller, L.: Tokio-Igaku. Skizzen und Erinnerungen aus der Zeit des geistigen Umschwungs in Japan, 1871-1876, Dtsch. Rdsch., 57: 312-329, 441-459; 1888 石橋長英、小川鼎三、今井正(訳)『東京医学』日本国際医学協会、一九七五年。
- (九) 小関恒雄「明治六、七年度東京大学医学部学科表」『日本医史学雑誌』二九卷、四六二～四七六頁、一九八三年。
- (一〇) 小関恒雄「榊俣先生の修学時代」『榊俣先生顕彰記念誌』二三三～二五二頁、榊俣先生顕彰会、一九八七年。
- (一一) 小関恒雄「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽(一)」『日本医史学雑誌』三三卷、三二七～三二七頁、一九八七年。
- (一二) 宗田一「医療今昔物語」脚氣『臨床科学』二三卷、一六四～一六四八頁、一九八七年。
- (一三) 西尾篤『繡像明治名医伝』第一号、刀圭書院、一八八三年。
- (一四) 根本曾代子『日本の薬学—東京大学薬学部前史—』南山堂、一九八一年。
- (一五) 阿知波五郎「わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響(四)」『日本医史学雑誌』一二卷四号、二～七六頁、一九六六年。
- (一六) 小関恒雄「明治初年の東京大学医学部」『方函』(一)、(二)『日本医史学雑誌』三〇卷、四五六～四六七頁、一九八四年、三一卷、四三〇～四四〇頁、一九八五年。
- (一七) 小池重「杏雲堂三代記(一)」『東京医事新誌』七〇卷、五二一～五二六頁、一九五三年。

(新潟大学医学部)

Notes on Leopold Müller and Theodor E. Hoffmann, founders of the Medical School of Tokyo in the early Meiji era (2)

by Tsuneo KOSEKI

Continuing from the previous paper (this journal: Vol. 29, No. 3, 276-290, 1983), the author has appended various chronological matters regarding Leopold Müller and Theodor E. Hoffmann; for example, the date of Müller's birth: April 21, 1822; the date of Hoffman's departure from Japan: November 24, 1875, etc.

The author also described their contributions to medical and pharmaceutical education and made a list of each man's writings.

Figure 1 on page 592 is a portrait of Müller printed in 1883. The author pointed out some mistakes in the details of the portrait.